

ベースレに贈られた象牙のミニアチュール競売される

野口秀夫

1. ベースレのメダリオン

教授：モーツァルトがベースレに贈った象牙製ミニアチュールは、2014 年 11 月 20 日にサザビーズの競売に掛けられ、218,500 英国ポンドで落札されたという。落札者の名前は公表されていない。

鳥代：このミニアチュール(右図)は、ベースレがパイロイトで 1841 年に 83 歳で亡くなった時に見つかったものだとアルトゥール・シューリヒが報告していたわね。

犬輔：それは『邦訳アイブルゼン』161 頁に言及されているのですが、肝心のシューリヒの出典は参照されないままです。

教授：その記述を見つけたよ。シューリヒは *Leopold Mozart: Reiseaufzeichnungen 1763 – 1771, Dresden, 1920* という本の *Die Bildnisse W.A. Mozarts 1762 – 1791* という付録の章の 87 頁にこう書いている。「ベースレのメダリオン：象牙のミニアチュール、胸像、半身像、4x2.8。作者：不明。成立：マンハイムにて 1777 年 11 月。所有者：宮中顧問官マリー・フォーゲル夫人、レーゲンスブルク。ヴォルフガングはこの控えめな小さな絵を彼の従妹マリー・アンナ・テークラ・モーツァルト“ベースレ”に与えた。それは彼女の死 (1841 年) まで所有されていた。(彼女はこの前に自身のポートレートを彼に送っていた)」。

鳥代：描かれているのは明らかに 20 代前半のモーツァルトの肖像ですが、何時ベースレが手に入れたものかは分かりませんから「マンハイムにて 1777 年 11 月」というのは断定的に過ぎますね。ミュンヘンで二人が合流したときに手渡されたのだとすれば 1778 年 12 月まで時期は広がるのではないのでしょうか。モーツァルトの死後ベースレは書簡だけはコンスタンツェの求めに応じて差し出しましたが、この肖像画は生涯大切に持っていたのですね。

教授：本ミニアチュールはマリー・フ



オーゲル夫人から、孫のヨーゼフ・ヘルマン・ゲルハーハーに引き継がれ^{注1}、長いことアウクスブルクのモーツァルトハウスに貸し出されていたんだ。それが今回競売に付された経緯は不明だ。

犬輔：サザビーズの説明ではベースレの後裔が保管していたものが競売に出されたと言うが、ベースレの遠い親戚の後裔は 1965 年に途絶えてしまっている^{注2}から不正確ですね。

鳥代：otto・ヤーンの『モーツァルト』初版第 2 巻 74 頁 注 26 には「このポートレートにレーオポルト・モーツァルトの『ヴァイオリン奏法』の扉絵のイメージ（前頁図）と比べてみると、父子がよく似ていると彼らの旧友が語っていることに同意できる。但し後の肖像画にこのような類似を見ることはできない」と書かれているのね。

教授：我々はロレンツォーニ画（1760 年）のレーオポルトの肖像画がこのミニアチュールに似ていると言ったことがあったね。

犬輔：ところで、この肖像画の真正性は証明されているのでしょうか。

鳥代：そうですよ。otto・エーリヒ・ドイチュは 1961 年の『同時代の図像に見るモーツァルトと彼の世界』 NMA X32 では真正な肖像画に区分しているのに、H. C. Lobbins Landon & Donald Mitchell ed.: The Mozart Companion, W. W. Norton & Company, New York-London, 1969 の彼が担当している“Mozart Portraits”章の 8 頁では一転して spurious portraits に分類しているんです。

教授：そうだね。唯一の報告がシューリヒの前記記述だとすれば、シューリヒも誰かの伝聞で書いている可能性があり、真正性はグレーゾーンだと言わざるを得ない。

犬輔：でも、見慣れたモーツァルトの肖像画のイメージと何となく似ているので別人の肖像画だとは思えませんね。ただ、ベースレに贈ったものなのかどうかは何とも言えませんが。

鳥代：小学館のモーツァルト全集第 1 巻（1990 年）には真正なモーツァルトの肖像画としてカラー写真が載っていますね。

犬輔：サザビーズはかつてこの肖像画がカラーで出版されたことがないと言っていましたが、それが間違いなことはこれだけでも十分ですが、ミヒャエル・ローレンツは Johannes Jansen: Wolfgang Amadeus Mozart: 1756-1791, Taschen Basic Art, 1996 の 27 頁にもカラー写真があるとクレームしています^{注3}。

教授：競売では一生懸命価値を強調するためあちこちに勇み足があるね。

2. その他の真正な肖像画

(1) 女帝マリーア・テレージアから贈られた大礼服を着たモーツァルト

教授：次はピエートロ・アントーニョ・ロレンツォーニ作 83.7×64cm 1763 年 ザルツブルク・モツァルテウム蔵の油絵だ。

鳥代：ここで着ている服についてレーオポルトが報告している手紙は以下の通りよ。「ヴォルフガング坊やの服がどんなだか、お知りになりたいですか？ 藤色の最高の生地できていて、胴着も同色で模様つきです。上着も胴着も金モールで幅広く二重に縁付けがしてあります。これはマクシミリーアン皇子のために作られたものです……」（1762 年 10 月 19 日）

犬輔：第 1 回ヴィーン旅行で下賜された服なんだね。

教授：ザルツブルクに帰郷してすぐ、すなわち 1763 年の初頭に記念撮影のように描かれたものと思われる。ナンネルも同様の服を下賜されているよ。



(2) パリで演奏するモーツァルト親子

教授：ルイ・カロジス・ドゥ・カルモンテル作 33×20cm シャンティイ・コンデ美術館蔵の水彩画だ。パリで1763年11月に描かれたと言われている。

犬輔：レーオポルトがこう書いています。「アマチュア画家のカルモンテル氏が、私たちの肖像画をととても見事に書いてくれました。……ヴォルフガング坊やがクラヴィーアを弾き、私はその椅子のうしろに立ってヴァイオリンを弾き、ナンネルはクラヴィーアに肘をついて、楽譜を手に持ち、歌っているようなポーズをしています」(1764年4月1日付)

鳥代：わたしにはレーオポルトの足が組まれているのが不自然に思えるんだけど、素人画家が描いたということだから脚色だとは思えないので、むしろレーオポルトがこのようなポーズをとったと考える方が妥当なのかしら。

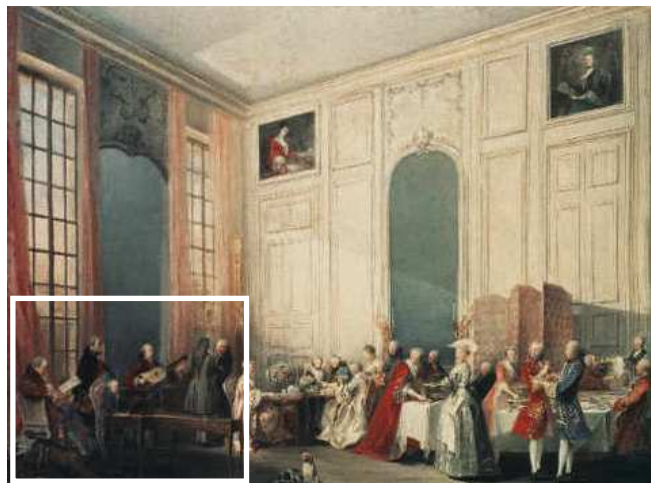
犬輔：ナンネルの顔とヴォルフガングの顔を結ぶ線上にレーオポルトの脚があるから、構図上の脚色と考えられなくもないよ。

教授：絵とはそういう疑問を投げかけるものだ。疑問を話し合ったり反駁したりすることは大切なことだね。



(3) パリのコンティ公の茶会でチェンバロを弾くモーツァルト

教授：ミシェル・バルテルミー・オリヴィエ作 53×68cm 1766年 ヴェルサイユ宮美術館蔵の油絵だ。



(4) ヴェローナのモーツァルト

教授：サヴェーリオ・ダッラ・ローザ作 71×58cm 1770年 故アルフレート・コルトー蔵の油絵だ。

鳥代：1770年、最初のイタリア旅行中に訪れたヴェローナにおいて、歓迎せぬ多忙な日々のなかで描かれたもので、譜面台に置かれた楽譜は、少し前に作曲された「クラヴィーアのためのアレグロ ト長調」K.72a だと言われているのね。

教授：「クラヴィーアのためのアレグロ ト長調」K.72aの原典はこの絵だけだから、「少し前に作曲」されたものかどうか、そもそもモーツァルトの作品なのかどうかも怪しいと言わざるを得ない。

犬輔：シューリヒの前掲書ではこの絵をチニャローリ作としており、レーオポルトの旅日記(ヴェローナから1769年12月27日-1770年1月10日)の“Cignaroli, Pittore”という記述を参照しています。



教授：それについては今日ではダッラ・ローザ作と確定している。だが、チニャローリ作の別の絵があったようで、ザルツブルク・モツァルテウムにはレーオポルト・ボーデ Leopold Bode が 1859 年にジャンベッティエーノ・チニャローリ Giambettino Cignaroli (1706-1770) 作の肖像画「ヴェローナのモーツァルト Mozart in Verona」を描き写したものがある^{注4}。それが右図だ。



犬輔：その絵の作者は Giuseppe Cignaroli also known as Fra Felice (1726-1796) という説もあるよ^{注5}。

鳥代：「ヴェローナのモーツァルト」という同じ名前だから混同したのかもしれないわね。二つの独立した絵があるんだわ。チニャローリの方は区別するために「リボンを付けたヴェローナのモーツァルト」と呼ぶべきだわね。

(5) リボンを付けたヴェローナのモーツァルト

教授：それではとっておきの絵を示そう。右図の油絵だ。1990 年までにオランダで発見されたという。「リボンを付けたヴェローナのモーツァルト」の原画に間違いない。現在海老澤敏氏の所蔵となっている。



犬輔：へー。ボーデの模写より顔が細長いですね。

鳥代：レーオポルトの旅日記のヴェローナの記録期間（1769 年 12 月 27 日 - 1770 年 1 月 10 日）に照らし合わせれば、モーツァルト 13 歳の肖像画で、ジャンベッティエーノ・チニャローリ最晩年の作品ということになります。

教授：高解像度のファイルがないので勘弁してもらいたいが、諸君らには現物を見る機会もあると思われる。非常にいい状態の絵だから期待していいと思われる。

犬輔：ベースレのメダリオンより真正性がありますね。

(6) 細密画

教授：この直径 5cm、象牙製の細密画は作者不詳だが、おそらく 1773 年にミラノにおいてマルティーン・クノラー作とも言われる。ザルツブルク・モツァルテウム蔵だ。

鳥代：随分痩せたモーツァルトね。

教授：ナンネルが 1819 年に「ヴォルフガングがイタリアから病気で帰ってきたときに描かれた絵」と言っているものがこの絵だということになっている。

犬輔：それに 17 歳にしては幼い顔だよ。

鳥代：「モツァルテウムのアーカイブには 1769 年 14 歳の肖像画と書かれている」という報告も NMA X32 にあるわ。

犬輔：あまり話題に上がらない絵だね。

鳥代：一番モーツァルトらしくないわね。



(7) 黄金拍車勲章をつけたモーツァルト

教授：次は作者未詳 75×65cm 1777年 マルティニーニ音楽院蔵の油絵だが、オリジナルは紛失してコピーのようだ。

鳥代：1770年にローマ教皇から授与された荣誉ある勲章を胸につけているのね。マンハイム・パリ旅行に先立ってザルツブルクで描かれ、ボローニャの恩師マルティニーニ神父に贈られたものよ。この肖像画について、モーツァルト自身は「ぼくの真面目さがあらわれている」と言い、父レーオポルトは「本人とまさに生き写し」だと言っているの。

犬輔：あれっ。ぼくが見たことのあるのと顔付きが違いますよ。

教授：それはザルツブルクに保存されているそのまたコピー（右下図）を見たんだろう。似ても似つかない顔だね。

鳥代：何の断りもなくこれらの写真が本やネットに使われているけれど、出所を明記しないと「本人とまさに生き写し」という文言とザルツブルク蔵の顔が組み合わせられたらとんでもないことになりますね。

教授：マルティニーニ音楽院蔵の方もオリジナルではないのだからうっかり本物と思いきまないようにしなければならない。

犬輔：コピー同士が全く異なった表情になるのだから、オリジナルがこの2つのコピーのように大柄のモーツァルトに描かれていたのかどうかは怪しいですね。もっとも、ローマ教皇から授与された荣誉ある勲章を胸につけている威厳のある姿を描くためにオリジナルでも大柄にしていたのかも知れませんが

鳥代：堅苦しい感じがするのはそのためなのかしら。



(8) 家族の肖像

教授：ヨハン・ネーポムク・デッラ・クローチェ作 140×186cm 1780-81年 ザルツブルク・モツァルテウム蔵の油絵は、母マリーア・アンナが額に入れて描かれている。

鳥代：4人の顔のきわだった同一性が印象的だと言われているのね。



(9) ヴィーンのフリーメイسنの儀式に参列するモーツァルト

教授：作者不詳。ヴィーン市立歴史博物館蔵の油絵で、右端がモーツァルトだ。

犬輔：モーツァルトが属していたのは「新・授冠の希望」でしたね。



(10) シルエット

教授：次のシルエットはヒェロニムス・レッシェンコール作
8.1×5cm 1785年 1785年度音楽演劇年鑑からだ。

犬輔：レッシェンコールは多くの著名人のシルエットを描いていて、それぞれがもっともらしいんですが、何故なのでしょう。

鳥代：顔の輪郭だけでその人の特徴を表すことができることをよく知っていた画家なのでしょう。モーツァルトは鼻が大きくておでこはあまり突出していないんだわ。

教授：第 225 回例会で紹介したが、1770 年代に出版された Johann Casper Lavater (ヨハン・カスパー・ラファーター) 著『Physiognomischen Fragmente zur Beförderung der Menschenkenntnis und Menschenliebe (人間性と人間愛をもたらす人相学断片)』全 4 巻の理論はゲーテ、フンボルトやリヒテンベルクが議論し、一般にはシルエットの特徴から人を特定したり、解釈するのに使われたりしたと言うから、レッシェンコールのシルエットもその用に供されたんだろね。



(11) メダリオン

教授：このレリーフはレーオナルト・ポッシュ作 赤色蠟製浮かし彫り 直径 9cm 1788 年のものだ。ポッシュは後にヴィーンからベルリンに移り、1820 年 2 月 9 日このメダリオンにモーツァルトの下の息子ヴォルフガングへ献辞を書いて贈った。その後モツァルターウム所有となったが、1945 年以降行方不明である。

鳥代：その献辞は次の通りよ。「若い友人だった父君の思い出にこれを御子息に捧ぐ。ベルリン、1820 年 2 月 9 日。L・ポッシュ。Der under Zeichnete Jugent Freund / des Vaters / widmet dieses dem Sohn zum / andenken / Berlin, den 9. Februar 1820 / L. Posch」

犬輔：この作品にはポッシュ自身のコピーがいくつもあるのでそちらの方も有名ですね。

鳥代：でも、赤色蠟らしく仕上がっている写真のものはレプリカですね。



(12) 義兄ヨーゼフ・ランゲの描いたモーツァルト

教授：さて有名な肖像画である。ヨーゼフ・ランゲ作 34.6×29.7cm 1789年春 ザルツブルク・モーツァルテウム蔵の油絵だ。1780年にアロイージア・ヴェーバーと結婚したランゲは、ブルク劇場の俳優であり、またアマチュア画家でもあった。

犬輔：あれっ。この絵は1782-83年の作品ではなかったんですか。

教授：1783年4月3日付レーオポルト宛て手紙で二枚の肖像画を一緒に送っていることを述べていることから、1枚がこのランゲ作のもの、そしてもう1枚はコンスタンツェのものという説だね。

鳥代：それが覆ったのは最近よ。1789年の春、プラハからドレスデン、ライプツィヒを経てベルリン、ポツダムを訪問したいわゆる北ドイツ旅行中にモーツァルトがコンスタンツェ宛てに書いた手紙の次の一節に基づく見解が有力とされたからなの。「ランゲ夫妻が時々来てくれるかどうか、肖像画は進んでいるかどうか」（1789年4月16日）。

教授：この未完の肖像画は長いことランゲの手元にあり、1825年頃やっとコンスタンツェの手に渡ったという。彼女の死後、1858年になって息子のカール・トーマスがこの父親の肖像をモツァルテウムに寄贈したんだ。

犬輔：そう言われてみると26-27歳というより33歳のモーツァルトだという方が風貌に相応しいですね。

鳥代：2011年11月19日-25日に日本で初公開されたときに見に行ったわ。やはり本物は見るべきね。眉毛の傍に血管が浮かんでいるのまで見えたのよ。



(13) ドレスデンのモーツァルト

教授：モーツァルトの最後の完成された肖像画あるいは最後に着手された肖像画はドーリス [ヨハンナ・ドロータ]・シュトック作 7.8×6.2cm 1789年 ザルツブルク・モツァルテウム蔵の銀筆による素描だ。

鳥代：ドーリス・シュトックは詩人テオドール・ケルナーの叔母に当たるのよ。

犬輔：1789年4月16日にモーツァルトはテオドール・ケルナーの父親に当たるクリスティアーン・ゴットフリート・ケルナー邸を訪ねているんです。ケルナーは法律家として名高く、シラーの友人であり、かつ自邸を本拠とした合唱団を組織し、ドレスデンの音楽生活の一翼を担った存在だったと言うよ。

鳥代：その義理の妹に当たるシュトックは訪ねてきたモーツァルトをモデルに即席で象牙紙に銀筆画を描いたのね。この手法は当時必ずしも一般的なものではなく、父親から教わったとも言われているわ。

教授：この絵は制作後50年程フリードリヒ・ケルナー（未詳）という人のところであって、指揮者のカール・エッケルト、ヘンリ・ヒンリクセン（ライプツィヒのペーターズ出版のオーナー）、アルビ・ロゼンタールに引き継がれた。そしてロゼンタールの死後、2005年にモツァルテウムが購入したというわけだ。

犬輔：以上14の肖像画が現在真正だと考えられているもののすべてなんですね。



注1：Mozart und seine Welt Zeitgenössischen Bildern, NMA X32, 1961

注2：Susanne M. Scholze: A visit to Maria Anna Thekla Mozart – Wolfgang's Basle
< http://www.sumas.de/postum_e.htm >

注3：Michael Lorenz: Musicological Trifles and Biographical Paralipomena
< <http://michaelorenz.blogspot.jp/2014/11/a-portrait-miniature-of-virtually.html> >

注4：< <http://www.mozarthaus.biz/en/874-postcard-mozart-in-verona.html> >

注5：< <http://www.gettyimages.nl/detail/nieuwsfoto/s/giuseppe-cignaroli-portrait-of-wolfgang-amadeus-mozart-nieuwsfoto/122218393> >

(作成：2015年1月31日、改訂：2015年2月16日)